

新しい詩の声 2018・作品

〈最優秀賞〉

岡本 直美

ひとつ

あたかもそこに空があったように
天を見ていた

空には空と呼ばれるところと
天と呼ばれるところがあり
あなたがこの世を去ってから
空は天ひとつになった
人はいつかそこへ行くと教えられていたから

あなたに話しかけるなら天だった
呼びかけに返ってくる声はなくとも
ひとり寂しいときは天を見上げた
天は白一色 それしか見えなくても

空のない私に
雨は空つぼの箱から降ってきた
日々は色もなく過ぎていき

朝日を夕やけを懐かしく思い出していた
そろそろ 空を取り戻しに行こうかと思う
私にはまだ明日の空が必要だと思った
空の下にしていることを
あなたも望んでいるような気がした

天ははるか遠く
今そこに、空ひとつ

〈優秀賞〉

福本 恵子

おにのかぞえかた

めんをつけると

こぶしをかためて みな

ちかづいてくる

いま じぶんが

いっぴきか

いっとうか

おには わからない

まめのつぶてをうけて

そとへ そとへ

おわれながら

(ひよつとすると ひとり)

おにのなかで やどる

めんをはずし

ちらばった まめをみる

ひしゃげているのがある

いよいよ

ひとりが

くつきりする

めんのはずせない

おにのかぞえかたが

たぶん

わかる

〔優秀賞〕

三好 郁子

熊

深い陰影を右側に置いて
ベッドの隅に熊がいる
生きてはいないが三十年そこにいる
達ちゃんが死んだのも知っている

私は熊を抱いて庭に出た
大きな水瓶に熊を沈めた
その夜遅く濡れて足をくねらせ
熊はベッドのいつもの席に座っていた
熊の目からずっと水滴が落ち私の指先を濡らし
達ちゃんが目を開いた
私は濡れた指先を伸ばして彼に触れた
待っていたのよ

五年も一度も現れないなんて不人情ね

どこに行っていたのよ
水甕と海とどこかで連なっているのか
深く貫く流れがあるのか

水死した達ちゃんの膨れた腹を押すと
潮を吹き苦い胃液を垂らした
腹から鰹や鰯やトビウオなんぞが出てきたら
お伽話になって
達ちゃんもめでたく亀に乗って帰って来る
夜半にはもう彼はいなくて
水瓶を覗いたら月が揺れていた

〈優秀賞〉

山田 裕樹

ふるさと

偽物のたぬき蕎麦と

偽物の木の葉どんぶりの間に

迷い込んでいる

私たちは

長い長いトンネルを抜け

互いに改札口の対面からタッチしたあと

その電子音の中に飲み込まれてしまった

(のだからか)

しかしながら

翌日も私たちは

生きていたのだが

偽物ばかり置かれたディスプレイの中には

あなたの姿しかない

私はというと

蕎麦職人につまみ出されてしまつて

濡れたアスファルトの上で

羽さえ閉じずに横たわっている

その翌日私は死んだ

目の前には湯気の立つ木の葉どんぶりがある

卵とじの隙間からのぞく

刻まれた三つ葉の淡い緑色が

私のふるさとになった

受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

岡本 直美（おかもと なおみ）

〈受賞の言葉〉

この度は最優秀賞を受賞出来ましたことを大変嬉しく、また心より感謝申し上げます。

受賞しました作品は亡き父を思い書いたものです。今年父の七回忌を迎え、父を見送った当時のこと、今日までの日々、時折感じます寂しさを綴ったものです。これまで父のことや家族のことを詩に書いてきましたが、その度に家族の有難さを感じています。

詩を書き始めて十数年が経ち、年月を重ね、詩にすることが自然に感じられるようになった今、この度の受賞を励みに今後も良い詩を書いていきたいと思います。

〈略歴〉

一九八四年生まれ、佐賀県在住。

十代の半ばより詩を書き始め、佐賀新聞の読者文

芸に投稿を始める（ペンネーム・岡本なお美）。
二〇一五年、第五三回・佐賀県文学賞・詩一席。
二〇一六年、第五四回・佐賀県文学賞・詩二席。
二〇一七年、第五五回・佐賀県文学賞・詩二席。
佐賀県の同人誌「扉」「滾々」に在籍。

●優秀賞

福本 恵子（ふくもと けいこ）

〈受賞の言葉〉

うれしいお知らせ、ありがとうございます。

詩を読むのがすきで、たのしみのひとつとしておりましたが、つくりはじめるようになりました。のは、だいぶ後になってからです。

つたないことばをすくっては、こっそりかきつける。ひとりよがりの十数年です。

この度は、みていただいたうえに、賞までいただけるなんて……。

本当にありがとうございました。

〈略歴〉

一九六六年十一月二九日、東京都品川区に生まれ

る。

事務員として勤めながら、三十歳ごろより詩をつくりはじめる。

日本児童文芸家協会・第八回つばさ賞・二席・詩「しょうが」。

日本児童文芸家協会・第二回作品奨励賞・佳作・詩「ねじ」「おてだま」。

愛知県名古屋市在住。

●優秀賞

三好 郁子（みよし いくこ）

〈受賞の言葉〉

この度は、私の拙い詩「熊」にお目をとめて頂き感謝申し上げます。

体長一メートルの縫いぐるみの熊がベッドにいます。長くそこにいるので彼は私のことはなんでも知っています。ときおり詩にも登場してくれます。寡黙ですが優れた役者です。

私は三十年近く、本州の西の端・山口市で詩を書いてきました。長年所属していました詩誌「らく

だ」が廃刊となり寂しい気持ちでおりました。奨励賞を頂き心が華やいております。

〈略歴〉

一九四七年一月二五日生まれ。

山口県山口市在住。

同人誌「風響樹」に所属。

●優秀賞

山田 裕樹（やまだ ゆうき）

〈受賞の言葉〉

このたびは優秀賞をいただきまして、ありがとうございます。本を書き終えた後に「なんとなく面白いものができたなあ」と満足していましたが、しばらくして読み返すと「わけがわからんなあ」と感じておりました。結果、良かったです。

私は『珈琲時光』という映画作品が好きで、これを見ると「さて、生きていこう」という気持ちになるので、同じように前向きな気分になれる詩なり短歌なりをこれからも作っていきたいです。賞金で息子たちにプラレールを買おうと思います。

〈略歴〉

一九八四年、福岡県生まれ。神奈川県在住。

山口大学教育学部総合文化教育課程文芸・芸能コースを卒業後、博物館のサービススタッフ等の職を経て、現在はIT企業に勤務。品質保証部門のマネージャーとしてスマートフォン向けアプリケーションの開発チームに所属。

大学時代の研究テーマは、サイレント映画の表現手法や、小津安二郎監督作品の演出方法など。妻とは大学時代にサークルで知り合い、現在はわんぱくな男の子二人を育てるために奮闘中。